

吉備国際大学研究紀要  
(国際環境経営学部)  
第20号, 47–55, 2010

## 環境配慮行動および社会活動の実践と生き方志向との関係 —岡山県の大学生を対象とした質問紙調査—

宮川 雅充<sup>\*1</sup>, 井勝 久喜<sup>\*1</sup>, 諸岡 浩子<sup>\*2</sup>, 廣田 陽子<sup>\*3</sup>, 土生 真弘<sup>\*3</sup>, 青山 勲<sup>\*3</sup>

Relationship between environmentally conscious behavior, social activity, and attitude toward life  
—A questionnaire survey on university students in Okayama Prefecture, Japan—

M. Miyakawa<sup>\*1</sup>, H. Ikatsu<sup>\*1</sup>, H. Morooka<sup>\*2</sup>, Y. Hirota<sup>\*3</sup>, M. Habu<sup>\*3</sup>, I. Aoyama<sup>\*3</sup>

キーワード：環境配慮行動, 社会活動, 生き方志向, 子どもの頃, 環境教育

### 1. はじめに

地球温暖化などの環境問題や貧困・経済格差問題など、現代社会は多くの問題を抱えており、このままでは持続不可能であることが指摘されている。これらの社会問題の多くは、互いに密接に関係しているため、問題の解決のためには、様々な問題を総合的に捉え、環境・社会・経済のバランスがとれた「持続可能な開発」によって、持続可能な社会の実現に取り組む必要がある（例えば、ESD-J 2006, 宮川ら2009a）。

持続可能な社会の実現を考えたとき、問題解決のための行動の例としては、以下のようなものが考えられる<sup>1</sup>。

- 個人として環境配慮行動（環境に対する負荷が相対的に小さい行動）を実践すること
- 社会に対して積極的に関わり活動すること（社会活動）

環境配慮行動や環境活動のような社会活動については、既報（宮川ら 2009b）で述べたように、子ど

もの頃との関連が示唆されている（Tanner 1980, 田尻・井村 1994, Tanner 1998, Chawla 1998, 比屋根・畑中 2001, 依藤・広瀬 2002, 依藤 2003, 降旗ら 2004, 降旗ら2006, 岡田ら2008, 宮川ら2008）。例えば、著者らが2006年度および2007年度に実施した2つの質問紙調査（岡山市民調査・岡山県大学生調査）の結果からは、子どもの頃の家庭環境や自然体験が、環境配慮行動や社会活動の実践に影響を及ぼしていることが示唆されている（宮川ら2008, 宮川ら2009b）。

著者らは、環境配慮行動や社会活動の実践に影響を及ぼす因子として、個人の生き方志向にも注目しており、両調査で質問項目に含めている。

本研究では、岡山県大学生調査の結果を利用して、環境配慮行動や社会活動の実践と回答者の生き方志向との関係を、共分散構造分析により分析した結果を報告する。さらに、環境配慮行動と子どもの頃の家庭環境や自然体験および生き方志向との関連についても分析することで、子どもの頃の家庭環境や自

<sup>\*1</sup>吉備国際大学（Kibi Intl. Univ.）, <sup>\*2</sup>くらしき作陽大学（Kurashiki Sakuyo Univ.）, <sup>\*3</sup>岡山大学（Okayama Univ.）

然体験が、環境配慮行動に及ぼす影響のメカニズムの一端を探ることを試みる。

## 2. 方法

### 2.1 岡山県大学生調査の概要

2007年11～12月に、岡山県内の3大学の学生を対象に、質問紙調査を行った。調査対象者の選定は、有意抽出法により行った。

質問項目は、性別・年齢、所属大学・学科、等の基本属性、家事（炊事・洗濯・掃除）を行う頻度、社会活動、生き方志向、環境配慮行動、環境問題に関する意識、子どもの頃の家庭環境・自然体験、高校生の時の総合的な学習の時間、等多岐にわたる。

環境配慮行動については、以下の8行動について、調査時における実施状況を「全くしない」、「めったにしない」、「ときどきする」、「いつもする」という選択肢で回答させた。

- ・ マイバック持参
- ・ 牛乳パック・トレイ等のリサイクル
- ・ 使用済みの紙の再利用
- ・ 待機電力節約
- ・ 冷暖房設定温度（冬20℃以下、夏28℃以上）
- ・ 環境に優しい商品の購入
- ・ 無農薬農作物の購入
- ・ 地元産農作物の購入

社会活動については、以下の6活動について、最近2年間の活動状況（大学の授業等での参加は除く）を、「0回」、「1回」、「2回」、「3回以上」という選択肢で回答させた。

- ・ 行政、民間が開催している講座・講演会
- ・ 町内会活動・集会
- ・ スポーツイベント・大会
- ・ ボランティア活動
- ・ 大学や短大などで開催されている公開講座・講演会

### ・ 市民団体での活動

子どもの頃の家庭環境・自然体験については、依藤・広瀬（2002）、依藤（2003）、降旗ら（2006）の研究を参考にして、以下の12項目について尋ねた。選択肢については、既報（宮川ら2009b）を参照されたい。

なお、これらの中には、例えば、「キャンプに行ったか」のように、子どもの頃の家庭環境および自然体験のいずれとも関係があると考えられる質問も含まれている。

- ・ 家の周りの自然で遊んだか
- ・ 動物や虫類を飼っていたか
- ・ 自分の家に田んぼや畑があったか
- ・ 田んぼや畑で作業をしたか
- ・ キャンプに行ったか
- ・ 理科の実験・観察は好きだったか
- ・ 地域のクラブに入っていたか
- ・ 家庭で節分・彼岸・節句などの季節の行事はあったか
- ・ 海外に住んでいたか
- ・ 祖父母と同居していたか
- ・ 家族団らんの時間はどのくらいあったか
- ・ 家族に物を粗末にして「もったいない」と言われたことがどのくらいあったか

生き方志向については、板津（1992）の開発した生き方尺度を参考として、以下の15問の質問群で評価した。（a）を付した9問の質問は、板津の生き方尺度に含まれていたものである<sup>2</sup>。これらに、（b）を付した6問の質問を加え、合計15問の質問群とした。各質問に、「あてはまらない」、「どちらかといえばあてはまらない」、「どちらかといえばあてはまる」、「あてはまる」という選択肢で回答させた。

- ・ 努力をおしまずに、自分のできることに向かって完全燃焼する（a）

- ・ 他者との関わりを大事にする (a)
- ・ 過去の失敗をくよくよしない (a)
- ・ 将来に希望と期待をいただいている (a)
- ・ 他人をないがしろにしない (a)
- ・ 何事も自分のことは自分でやる (a)
- ・ 義務や責任を進んで果たす (a)
- ・ できるだけ多くの物事を見聞きしようとする (a)
- ・ 自分自身の行為に自信を持っている (a)
- ・ 集団でリーダーになることが多い (b)
- ・ 困っている人がいたら放っておけない (b)
- ・ ボランティア活動には、自分から関わっていく (b)
- ・ 募金活動にはすすんで寄付をする (b)
- ・ 地域の行事や自治会、町内会に参加する (b)
- ・ 政治に関心がある (b)

## 2.2 分析方法

2.1節に示した環境配慮行動の中には、炊事を日常的に行っていない者にとっては、回答が困難であるものも含まれている。そこで、本研究では、炊事を「めったにしない」と回答した者は除外して分析を行うことにした。また、分析に使用する質問項目に、無回答の項目がみられた回答についても、除外して分析することにした。

環境配慮行動および社会活動に関する実践度を、以下の方法で得点化し評価することとした。

環境配慮行動については、「全くしない」、「めったにしない」、「ときどきする」、「いつもする」の各選択肢につき、0, 0, 1, 2点を与え、8項目の合計点を算出し、その得点(0~16点)を利用して実施状況を評価した。

社会活動(6活動)について、「0回」、「1回」、「2回」、「3回以上」の各選択肢につき、0, 1, 1, 1点を与え、合計点を算出し、その得点(0~6点)を利用して活動状況を評価した。

生き方志向に関する回答に、最尤法、プロマックス回転<sup>3</sup>による因子分析を適用した。

抽出された生き方志向に関する因子が、環境配慮行動および社会活動に及ぼす影響を分析した。その際、回帰係数の有意確率がすべて $p < 0.05$ となるまで、影響が最も小さいと思われるパスを削除して分析を繰り返した。なお、この分析では、環境配慮行動および社会活動の誤差変数間の相関についても考慮した。

さらに、既報(宮川ら2009b)で示唆された子どもの頃の家庭環境や自然体験が環境配慮行動に及ぼす影響のメカニズムの一端を探ることを目的として、環境配慮行動の得点を目的変数、子どもの頃に関する回答を説明変数とした重回帰分析を、生き方志向の因子得点を調整した場合と調整しなかった場合の2通りについて行い、その結果を比較した。なお、この分析は、性別の影響を調整して行った。

すべての統計解析は、SPSS 15.0J および Amos 7.0 を利用して行った。

## 3. 結果および考察

### 3.1 回収結果および分析対象

調査の結果、797名から回答を得た。

回答者には、社会学、社会福祉学、理学、工学、保健、家政、芸術、環境、等、様々な分野の学科に所属する者が含まれていた。

本研究の分析対象は、552名であった。表1に、552名の基本属性を示す。

### 3.2 生き方志向に関する因子分析の結果

因子分析の結果、「過去の失敗をくよくよしない」と「政治に関心がある」の2項目については、共通性が、それぞれ0.158, 0.078であり、著しく低い値を示していた。よって、これらの2問の質問を除外して因子分析を行った結果、3つの因子が抽出された。

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度は0.848,

表1：分析対象者（ $N=552$ ）の基本属性

|      | 性別         |            | 学年         |            |            |           | 合 計        |
|------|------------|------------|------------|------------|------------|-----------|------------|
|      | 男性         | 女性         | 1 年        | 2 年        | 3 年        | 4 年       |            |
| A 大学 | 161 (58.1) | 116 (41.9) | 58 (20.9)  | 98 (35.4)  | 114 (41.2) | 7 (2.5)   | 277(100.0) |
| B 大学 | 101 (69.7) | 44 (30.3)  | 14 (9.7)   | 67 (46.2)  | 46 (31.7)  | 18 (12.4) | 145(100.0) |
| C 大学 | 28 (21.5)  | 102 (78.5) | 61 (46.9)  | 14 (10.8)  | 43 (33.1)  | 12 (9.2)  | 130(100.0) |
| 合 計  | 290 (52.5) | 262(47.5)  | 133 (24.1) | 179 (32.4) | 203 (36.8) | 37 (6.7)  | 552(100.0) |

数値は度数および比率（%）を示す。

表2：プロマックス回転後の因子負荷行列

| 質問項目\因子                      | 因子           |              |              |
|------------------------------|--------------|--------------|--------------|
|                              | 1            | 2            | 3            |
| 義務や責任を進んで果たす                 | <u>0.609</u> | -0.061       | 0.130        |
| 何事も自分のことは自分でやる               | <u>0.607</u> | -0.199       | 0.103        |
| 自分自身の行為に自信を持っている             | <u>0.600</u> | 0.030        | -0.142       |
| 努力をおしまずに、自分のできることに向かって完全燃焼する | <u>0.538</u> | 0.021        | 0.124        |
| 集団でリーダーになることが多い              | <u>0.515</u> | 0.343        | -0.253       |
| できるだけ多くの物事を見聞きしようとする         | <u>0.447</u> | -0.071       | 0.190        |
| ボランティア活動には、自分から関わっていく        | -0.119       | <u>0.661</u> | 0.133        |
| 募金活動にはすすんで寄付をする              | -0.059       | <u>0.590</u> | 0.042        |
| 地域の行事や自治会、町内会に参加する           | 0.001        | <u>0.531</u> | -0.053       |
| 他人をないがしろにしない                 | 0.030        | -0.043       | <u>0.703</u> |
| 他者との関わりを大事にする                | 0.029        | 0.133        | <u>0.456</u> |
| 困っている人がいたら放っておけない            | 0.019        | 0.325        | <u>0.402</u> |
| 将来に希望と期待をいだいている              | 0.287        | 0.277        | 0.126        |
| 過去の失敗をくよくよしない                | 分析から除外       |              |              |
| 政治に関心がある                     |              |              |              |

表3：因子相関行列

| 因子       | 能動的実践的態度 | 社会貢献  | 他者尊重  |
|----------|----------|-------|-------|
| 能動的実践的態度 | 1        | 0.476 | 0.554 |
| 社会貢献     | 0.476    | 1     | 0.518 |
| 他者尊重     | 0.554    | 0.518 | 1     |

Bartlett の球面性検定では  $p < 0.001$  であり、この因子分析は適切であると考えられた。

表2に、プロマックス回転後の因子負荷行列を示す。表3に、因子相関行列を示す。

因子負荷量が高かった質問項目の特徴から、第1因子は、「能動的実践的態度因子」、第2因子は、「社

会貢献因子」、第3因子は、「他者尊重因子」と命名した。

なお、「能動的実践的態度因子」は、板津の研究で抽出された第1因子と同じ名称である。本研究では、2.1節で述べたように、板津の生き方尺度と同一の質問群を使用したわけではないため、板津の結



果と単純に比較することはできないが、この因子と関連が強いと考えられた質問項目には、板津の研究では、その他の因子（「自己の創造・開発」、「自他共存」、「こだわりのなさ・執着心のなさ」）との関連が強かったものもみられた。

### 3.3 環境配慮行動および社会活動と生き方志向との関係

環境配慮行動および社会活動と生き方志向との関係について、図1に示すようなモデルが採択された。図中には、有意 ( $p < 0.05$ ) であったパスを標準化係数とともに示している。なお、環境配慮行動および社会活動に関する単純集計結果は、既報（宮川ら2009b）を参照されたい。

モデルの適合度指標は、 $GFI = 1.000$ 、 $AGFI = 1.000$ 、 $RMSEA < 0.001$ であり、十分な適合を示した。

環境配慮行動との間には、社会貢献因子および他者尊重因子について、有意な正の関連が認められた。このことは、社会貢献に関わる意識が高い者および他者尊重に関わる意識が高い者に、環境配慮行動の実践度が高い者が多いことを意味する。

また、社会活動との間には、社会貢献因子について、有意な正の関連が認められた。社会貢献因子は、

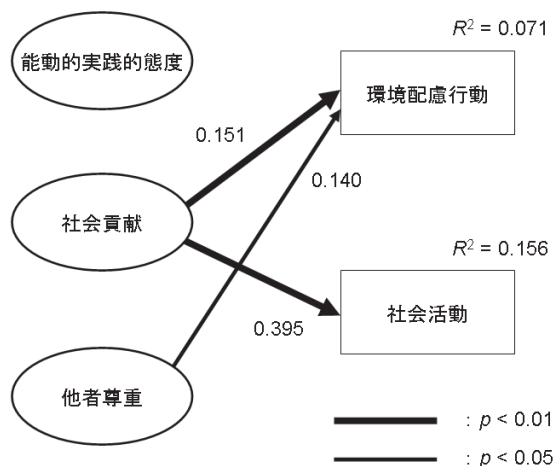


図1：環境配慮行動および社会活動と生き方志向との関係

その質問文が示す通り、社会活動の実践度に対する回答者の自己評価の影響を強く受けているため、実際の社会活動の実践度と強く関係していることは、分析の前から予想されたことであった。その他の因子については、有意な関連は認められなかった。

なお、環境配慮行動と社会活動の得点間の相関係数は0.143であったが、生き方志向の影響を除いた偏相関係数は0.052となり、ほとんど相関が認められなくなった。

以上より、環境配慮行動には、生き方志向について抽出された3因子のうち、社会貢献因子および他者尊重因子が影響を及ぼしていることが示唆された。また、社会活動については、社会貢献因子との間には予想された通り有意な関連が認められたが、その他の生き方志向に関する因子との間には、有意な関連は認められなかった。

### 3.4 環境配慮行動と子どもの頃および生き方志向との関係

これまでに、子どもの頃の家庭環境や自然体験（宮川ら2009b）および成人後の生き方志向（3.3節）が環境配慮行動の実践と関係していることが明らかとなった。

子どもの頃の家庭環境や自然体験が環境配慮行動の実践につながるメカニズムとして、以下の2つのケースが考えられる。

- ・ ケース1：子ども頃の家庭環境や自然体験が、成人後の生き方志向を形成し、その生き方志向が行動につながる
- ・ ケース2：子どもの頃の家庭環境や自然体験は、生き方志向の形成を介さずに、独立に行動の実践につながる

このことを考慮して、以降では、子どもの頃の家庭環境や自然体験が、環境配慮行動に及ぼす影響のメカニズムの一端を探ることを試みた。

重回帰分析を用いて、環境配慮行動の得点に及ぼ

す各要因の影響を分析した。分析は、性別の影響を調整して行い、環境配慮行動と子どもの頃の各質問に対する回答との関連について、生き方志向（社会貢献因子および他者尊重因子）を説明変数に含めた場合と含めなかった場合の回帰係数をそれぞれ求めた。生き方志向の形成を介して環境配慮行動につながっているのであれば、生き方志向の影響を調整することで、見かけ上、環境配慮行動と子どもの頃との関連がなくなることになる。

図2 (a) に、「キャンプに行ったか」に関する分析結果を示す。図には、重回帰分析によって得られた回帰係数とその95%信頼区間を示している。白丸印は、生き方志向の影響を調整していない結果、黒丸印は、生き方志向の影響を調整した場合の結果である。図の上部には、「キャンプに行ったか」に関する回答の影響を調整した生き方志向（社会貢献因子および他者尊重因子）の回帰係数の有意確率を示している。

子どもの頃の経験が、環境配慮行動の実践に生き方志向の形成を介さずにつながるのであれば、生き方志向の影響を調整しても、子どもの頃と環境配慮行動との関係に変化は生じないはずである。

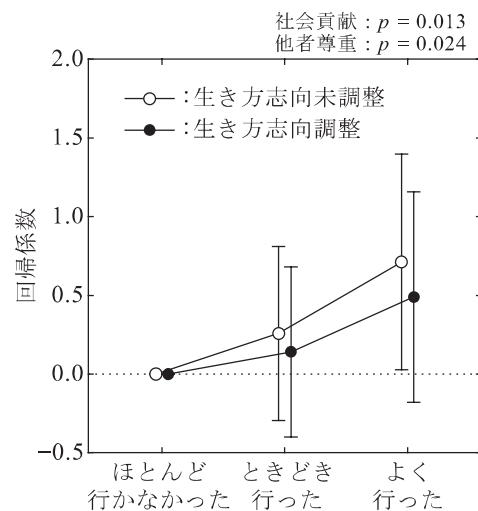
しかし、図2 (a) では、生き方志向の影響を調整した後も、回帰係数の上昇傾向はみられたが、その傾きは半減した。このことは、子ども頃のキャンプの経験が、成人後の生き方志向を形成し、その生き方志向が行動につながっている場合が少なからずあることを示唆している。

図2 (b) には、「家庭で節分・彼岸・節句などの季節の行事はあったか」に関する分析結果を示している。この場合、回帰係数に若干の減少が認められるが、生き方志向の影響を調整した後も、回帰係数に有意な上昇が認められている。このことから、子どもの頃、家庭で節分・彼岸・節句などの季節の行事はあったかどうかについては、生き方志向の形成を介さず、独立に環境配慮行動の実践につながっ

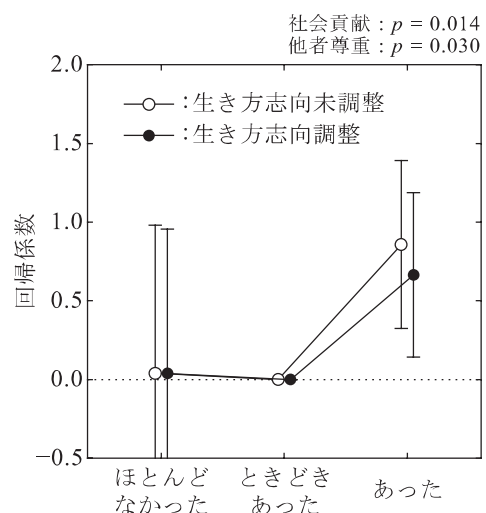
ている場合が多いと考えられる。

なお、図2 (a), (b) のいずれにおいても、子どもの頃の影響を調整した後も、生き方志向と環境配慮行動との間には、有意な正の関連が認められた。

その他、「家の周りの自然で遊んだか」および「理科の実験・観察は好きだったか」についても同様の分析を行ったが、図2 (b) と同様に、生き方志向



(a) キャンプ



(b) 家庭行事

図2：環境配慮行動と子どもの頃および生き方志向との関係

の影響を調整しても、子どもの頃との関係に、顕著な変化は認められなかった。

以上のように、本研究では、子どもの頃の家庭環境や自然体験が環境配慮行動の実践につながるメカニズムとして、ケース1を支持する結果、ケース2を支持する結果、の両方が得られ、明確な結論を得ることはできなかった。この点については、今後、質問紙調査のみではなく、インタビュー調査などを行うことで、さらなる検討が必要と考えられる。

#### 4. おわりに

本研究では、岡山県の大学生を対象に実施した質問紙調査の結果を利用して、環境配慮行動や社会活動の実践と回答者の生き方志向との関係を検討した。その結果、以下の成果が得られた。

生き方志向に関する回答を因子分析した結果、能動的実践的態度因子、社会貢献因子、他者尊重因子が抽出された。

環境配慮行動と生き方志向との関係を分析した結果、社会貢献因子および他者尊重因子との間には、有意な正の関連が認められた。このことは、生き方志向において、社会貢献に関わる意識が高い者および他者尊重に関わる意識が高い者に、環境配慮行動の実践度が高い者が多いことを意味する。一方、社会活動と生き方志向との関係を分析した結果では、社会貢献因子との間にのみ、有意な正の関連が認められた。

さらに、環境配慮行動と子どもの頃との関連を、生き方志向（社会貢献因子および他者尊重因子）の影響を調整した場合、調整しなかった場合の2通りの方法で分析することにより、子どもの頃が環境配慮行動の実践に及ぼす影響のメカニズムの一端を探ることを試みた。その結果、子どもの頃のキャンプの経験の場合、子どもの頃の経験が、成人後の生き方志向を形成し、その生き方志向が行動につながっていることが多いことが示唆された。一方で、その

他の項目の場合には、子どもの頃の経験は、生き方志向の形成を介さずに、独立に環境配慮行動の実践につながっていることが多いと考えられた。しかし、この分析については、明確な結論は得られておらず、今後さらなる検討が必要である。

なお、本研究では、環境配慮行動、子どもの頃、生き方志向のいずれについても、回答者自らの主観的評価に基づいて評価している。そのため、無告知バイアス<sup>4</sup>（Non-reporting bias）や追従バイアス<sup>5</sup>（Obsequiousness bias）の影響により、見かけ上の関連が認められたにすぎない可能性も考えられる。よって、今後は、インタビュー調査などの質的研究についても行うことで、本研究で得られた成果を確認する必要があると考えられる。

#### 謝 辞

本研究は、財団法人八雲環境科学振興財団の平成19年度環境研究助成、平成20年度吉備国際大学学内共同研究費ならびに科研費若手研究B（研究課題番号：19700620）の助成により行われたものである。ここに記して、深く感謝の意を表す。

#### 注と参考文献

1. これらの行動の実践が、持続可能な社会の実現にどの程度寄与するのかについては議論の余地がある。また、これらの行動を実践することのみが持続可能な社会の実現に貢献するための方法ではないことを、念のため申し添えておく。
2. 板津の生き方尺度では、「過去の失敗をくよくよ後悔しない」となっているものを、「過去の失敗をくよくよしない」とするなど、若干の変更を加えた質問項目もある。
3. 因子間に相関を仮定する斜交回転の1つ
4. プライバシーを侵害されたり、恥ずかしい思いをさせたりする質問については、回答がはぐらかされ

- ることがある。一般に、自尊心に関わる質問や、社会的・道徳的に「あるべき姿」を尋ねようとする質問の場合にみられる（中山，2008）。
5. 回答がすべて、情報の聞き取り手の気に入るような方向に変わってしまう場合がある（中山，2008）。
- Chawla L, 1998, Significant Life Experiences Revisited: a review research on sources of environmental sensitivity, *Environmental Education Research*, 4(4), 369-382.
- ESD-J(持続可能な開発のための教育の10年推進会議), 2006, 平成17年度「国連持続可能な開発のための教育の10年」ガイドライン, 環境省総合環境政策局環境教育推進室委託.
- 降旗信一, 畠山芽生, 櫃本真美代, 伊東静一, 石坂孝喜, 又井裕子, 2004, Significant Life Experiencesの成立と発展, *環境教育・青少年教育研究*, 3, 13-24.
- 降旗信一, 石坂孝喜, 畠山芽生, 櫃本真美代, 伊東静一, 2006, Significant Life Experiences (SLE) 調査の可能性と課題, *環境教育*, 15 (2), 2-13.
- 比屋根哲, 畑中勝也, 2001, 森林活動家の生活体験に関する分析事例－森林教育研究へのライフヒストリー法の応用, *林業経済研究*, 47 (2), 24-31.
- 板津裕己, 1992, 生き方の研究－尺度構成と自己態度との関わりについて－, *カウンセリング研究*, 25 (2), 85-93.
- 宮川雅充, 井勝久喜, 諸岡浩子, 土生真弘, 青山勲, 2008, 環境配慮行動および社会活動の状況とそれらの関連要因－子どもの頃の家族交流・自然体験に注目して－, 日本環境教育学会第19回大会（東京）研究発表要旨集, 215.
- 宮川雅充, 井勝久喜, 諸岡浩子, 土生真弘, 青山勲, 2009a, 「持続可能な開発」の認知率とその関連要因－岡山市民を対象とした質問紙調査－, *環境教育*, 18 (3), 53-58.
- 宮川雅充, 井勝久喜, 諸岡浩子, 廣田陽子, 土生真弘, 青山勲, 2009b, 環境配慮行動および社会活動の実践と子どもの頃との関連－岡山県の大学生を対象とした質問紙調査－, 吉備国際大学国際環境経営学部研究紀要第19号, 37-46.
- 中山健夫, 2008, 健康・医療の情報を読み解く 健康情報学への招待, p39, 丸善, 東京.
- 岡田成弘, 岡村泰斗, 飯田稔, 降旗信一, 2008, 少年期の組織キャンプにおける Significant Life Experiences が成人期の環境行動に及ぼす影響, 日本環境教育学会第19回大会（東京）研究発表要旨集, 212.
- 田尻由美子, 井村秀文, 1994, 幼児の環境意識・態度形成に影響を及ぼす母親の生活行動に関する調査研究, *環境教育*, 4 (1), 8-18.
- Tanner T, 1980, Significant Life Experiences: A new research area in environmental education, *Journal of Environmental Education*, 11 (4), 20-24.
- Tanner T, 1998, On the origins of SLE research, questions, outstanding, and other research traditions, *Environmental Education Research*, 4 (4), 419-423.
- 依藤佳世, 広瀬幸雄, 2002, 子どものごみ減量行動を規定する要因について, *環境教育*, 12 (1), 26-36.
- 依藤佳世, 2003, 子どものごみ減量行動に及ぼす親の社会的影響, *廃棄物学会誌*, 14 (3), 166-175.



### Abstract

A questionnaire survey was conducted to investigate the relationship of environmentally conscious behavior and social activity with attitude toward life. The questionnaire included questions on environmentally conscious behavior, social activity, attitude toward life, childhood conditions, and so on. A total of 797 undergraduate students from three universities in Okayama Prefecture answered the questionnaire. Those who answered “I seldom cook” were excluded from the analyses because they seemed to find it difficult to answer some questions dealing with environmentally conscious behavior. Thus, a total of 552 valid responses were obtained. A covariance structure analysis was applied to investigate the relationship between the environmentally conscious behavior, social activity, and attitude toward life. The main results were as follows. The factor analysis of the answers to the questions on attitude toward life extracted three factors, namely, “active practice attitude,” “contribution to society,” and “respect for others.” The regression analysis revealed that “contribution to society” and “respect for others” positively and significantly correlated with the environmentally conscious behavior, and “contribution to society” positively and significantly correlated with social activity. These results suggest that enhancing “contribution to society” and “respect for others” could promote sustainable action such as environmentally conscious behavior and social activity. Since we found significant relationships of these actions with childhood conditions in our previous study, it seemed reasonable to suppose that childhood conditions influence attitude toward life, which in turn, leads to sustainable action. In order to confirm this hypothesis, an additional analysis was conducted in this paper; however, further investigation is required.

**Key words** : Environmentally Conscious Behavior, Social Activity, Attitude toward Life, Childhood Conditions, Environmental Education